東日本大震災災害活動報告

福島県須賀川市消防団　団長　佐藤　茂

須賀川市は福島県のほぼ中央に位置し、国道４号を挟んで東西に伸び、西に那須連峰、東に阿武隈高地の山並みを望み、市内中心部を阿武隈川と釈迦堂川がゆったりと流れる、人口約８万人、面積約280㎢の自然環境に恵まれたまちであり、須賀川市消防団は、13分団、団員約1,200人、平均年齢30.24歳と比較的若く、車両台数は74台を擁している。

３月11日（金）14時46分、自宅にいた私は立っていられないほどの激しく長い揺れに、これは大変な事態になったのではないか、負傷者が発生しなければいいが･･･と思った。

揺れが収まった後、要請を受けた市役所で情報収集や対応を協議しながら、負傷者発生などの情報から現地へ向かうも、電柱の倒壊や道路の損壊などにより、迂回しながらようやく辿り着ける状態であった。

様々な情報が入ってくる中、夜になって藤沼湖が決壊し行方不明者が発生したという情報と、消防団への捜索要請があったため、すぐさま対応を協議し、翌12日から自衛隊・警察署・消防署・消防団による捜索が開始された。決壊による家屋流失の現場はすさまじく、その光景を目の当たりにし息をのんだ。藤沼湖畔に妻の実家があるため50年前から見てきているが、まさか決壊するなど夢にも思わなかったし、誰も想定はできなかったのではないかと思う。８人の行方不明者のうち、12日に４人、13日、14日にそれぞれ１人ずつ遺体で発見されたが、以降懸命の捜索にもかかわらず２人は発見されず、３月27日で捜索は打ち切ることとなった。その後、１カ月以上経過した４月24日に二本松市の阿武隈川で１人が発見されたものの、残り１人は未だに行方不明のままである。

被災した学校校庭

当市は震度６強を観測し、８月25日現在、死者10名、行方不明者１名、家屋の被害約

藤沼湖決壊による被災現場

被災した建物

14,000戸、市民生活を支えるインフラも深刻な被害を受け、市庁舎も被災するなど大きな被害を受けた。うち、藤沼湖決壊による被害は、死者７人、行方不明者１人、家屋の流失・全壊22戸となっており、死者・行方不明者・家屋の浸水の大部分はこれによるものである。

消防団関係の被害は、消防屯所全82箇所中、被害が19箇所、防火貯水槽14箇所、消火栓８箇所などであったが、車両には被害がなく、何よりも消防団員に殉職者や負傷者がなかったことが幸いであった。

消防団員は、震災当日から当該地域の警ら・広報活動などを行いながら、翌日から行方不明者の捜索活動を行うなど、自宅が被災している団員も数多くいるにもかかわらず、消防精神を発揮し献身的に活動してくれたことに感謝するとともに、団長命令に嫌な顔ひとつ見せず行動してくれたことは、各々が事の重大さを認識していたことはもちろん、更に言えば日頃の訓練の賜物であったと自負している。当市では、地震による火災の発生や停電がなかった事が、消防団が活動するうえ

被災した消防屯所

でもプラス材料であった反面、ガソリンなど燃料不足への対策と、携帯電話が繋がらないため無線機が有効であったことから、無線機の整備や通信訓練の必要性も感じてきた。

消防団は火災時における消火活動のみならず、今回のような地震や水害など活動は多様であり住民の期待も大きい。しかし、家庭などで対応できるであろうごく小規模なものも、地域によっては消防団が対応せざるを得ない現状もあり、消防団員への負担が大きくなっている事が、消防団員の確保に少なからず支障をきたしている。何でも消防団に･･･という風潮を、自分達で出来ることは自分達でという自主防災の観点からも、見直すべきところがあるのではないだろうか。

最後に、消防団が活動するにあたり、多くの市民の協力をいただいたことに感謝するとともに、当市への温かいご支援をいただきました全国の皆様方に、誌上をお借りしまして御礼申し上げます。

被災した市庁舎内部

被災した道路

藤沼湖決壊による被災現場